

人権コラム 心、豊かに

◆ まずは知ることから

毎年4月27日は「哲学の日」です。紀元前399年のこの日、古代ギリシアの哲学者ソクラテスが時の権力者から死刑宣告を受けて、刑の執行として獄中で毒を飲まされて亡くなったことに由来するとされています。ソクラテスは倫理学（道徳哲学）の祖であるといわれています。倫理学とは「人はどう生きるべきなのか」、「正しい行いとはどういったものか」といった疑問について研究する哲学の分野の一つです。

そんなソクラテスの哲学を表すものに「無知の知（不知の知）」という言葉があります。これは「知らないということを知覚する」という意味で、ソクラテスが当時、知恵者とされていた人たちと対話する中で「知らないことを知っていると思いついでいる人々よりは、知らないことを知らないと自覚している方が、知恵の上で少しばかり優っている」と気づいた体験から来たものです。

これは、様々な人権問題について考える際も参考とすることができるのではないのでしょうか。例えば「性的少数者」という言葉は知っていても、自分の周囲にいないと思いついでいると、ふとした瞬間に何気ない言動が当事者を傷つけてしまうかもしれません。また、障がいのある人と接する際にも「車いすを使っている人にはこの対応」、「視覚障害のある人にはこの対応」といったように、マニュアル的に接してしまうと適切な配慮ができない場合もあるのです。

このように「解ったつもり」、「マニュアル通り」の対応をするのではなく、「この人が今、本当にしてほしいことは何だろう」と考え対応した方が、より適切な配慮ができるのではないのでしょうか。

「哲学」と聞くと難しく聞こえてしまいがちですが、日頃の人権に対する自分の理解がうわべだけのものになっていないか、見つめ直す機会にしてみるのはいかがでしょうか。

「広報ひた」 令和3年4月1日号掲載